
砂糖づけの指先

麦子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

砂糖づけの指先

【Nコード】

N3059P

【作者名】

麦子

【あらすじ】

仲良しこよしな恋人同士のとある一日をこっそりと覗いてみた短いお話たち。

ひたすら甘い2人の仲をいい意味で邪魔するお友達もいます。

午前7時45分（前書き）

甘過ぎ警報です。

午前7時45分

きみといると、毎日がくすぐったいです。

「春ちゃん、頬つぺた真っ赤じゃん！」

冷蔵庫の冷気みたいなキンキンに冷えた風と格闘しながら歩く。おいしい匂いのするパン屋さんの前を素通りしてお腹の虫の声も聞かなかったふりをする。だけど、後ろから聞こえてきたあつたかいコーンスープみたいな声にはちゃっかり反応しちゃうから、困ったものです。

「こんな薄着だけじゃ今年の冬は乗り切れねえから！ホラー、手も冷たいし！女の子は身体冷やしちゃダメなんだからな！めっ！」

わたしを見るなり、自分の身にまとっていたマフラーを冷えきったわたしの首にぐるぐる巻き付けてどこかの心配性なお母さんみたいな台詞を並べる。その上コートまで脱ぎはじめてしまうから慌てて止めた。きみのおかげでもう十分、あつたかくなりました。

「さ、寒いからさあ…手繋ぎたくね？」

「つか、繋ぎたいデス。と、さっきまでマフラーに隠れていた彼の顔がみるみる赤くなっていく。つられてわたしも赤くなる。今ならマフラーも手袋もなにもなくても冬を乗り越えられそうな気さえした。」

「朝から恋人繋ぎしてるカップルみるとなんかこう無性に、えんがちょーっ！て、してやりたくならねえ？」

「ならないならない」

「その腹黒い手つきやめろ」

わたし達の後ろを歩いていた坂田くんの友達のひとりである野上くんが、毒のあることばを甘い笑顔に乗せてさらりと言い放ちます。他のお友達に冷静にツツコミをいれられても、ケロリとした顔を崩さない野上くんは「おーい」とわたし達に向かって、話かけてくる。

「春ちゃん、寒そうっすねー。貼るホッカイロ、背中に貼ってやるうか？大量に」

「え！？それ…火傷しない…？」

「さあ？」

「春野で試してみりゃあ、分かるだろ。おら、背中出せ背中」

「ええーっ」

「お前らさあ、いい加減やめてくんない！？いちいち邪魔しようとするのやめてくんない！？」

「俺らなりの愛だよ、愛」

「そんな愛いらねーっつの！」

野上千たちに茶化されてどつかれて、それでも繋がれた手は緩まないから、思わずひとりで恥ずかしくなる。わたしの赤い顔に気付いたきみは、目を丸くして言うのです。

「まだ寒い？」

熱いくらいだよ、とゆっくりときみの大きな手を握りかえすさむくであつたかい朝の出来事。

午前11時57分（前書き）

ただのバカップルです。

午前11時57分

何度でも言うよ、だいすきなんです。

「絶対弄ばれてポイされるに決まってる！」

暖かい空気と温かいごはんを満喫していたのに、友達の衝撃的な一言に一瞬で心が氷河期に逆戻り。飲み込んだうどんがちよっと出そうになって両手で口元を押さえる。

「あんたみたいなぽけつとしてる子なんかペロリよペロリ！そんで食い逃げされるに決まってるじゃない！」

ああ、恐ろしい！と友達が頭を抱える。坂田くと付き合うことになったよと照れながら勇気を出して告白しただけに、何故こんなことに？ここはしっかりと自分の意気込みを伝えておかないと！温くなったミルクティーを飲み干して立ち上がる。

「大丈夫！わたしが坂田くんのことずーっと好きでいるから！」

なにが大丈夫！？と言う友達の下ツコミの直後、ガシャーン！と食器が割れる音がした。後ろを振り向いてみると、お盆を持ったまま固まっている真っ赤な顔をした坂田くんと目が合った。坂田くんの足元には無惨な姿になった日替わり定食。プシュー、と頭のとっぺんから湯気が出てきそうなくらい熱くなったわたしの手をギュツと握った坂田くんの手もあつくて汗ばんでいた。

「一生、大事にします」

「だから、春ちゃんを俺に下さい！！」と、友達の前で土下座した坂田くんが食堂のみんなの注目を集めたのは言うまでもありません。

「昼間っからプロポーズまがいなこと言ってる青臭いヤツ見てると、なんかこう無性にそいつの顔面にパイ投げしてやりたくならねえ？」

「後片付けが面倒だろ」

「っーか野上、お前どっからそのパイ持ってきたんだ」

「企業秘密」

そんなわたしたちの後ろで、野上くんたちがなにやらコソコソとしていたことに気付くのは、坂田くんの顔がパイまみれになってからのお話です。

午後14時22分（前書き）

いつもいっしょ。

午後14時22分

あくびをするタイミングがいつしょ。それだけで、しあわせ。

講義の真つ最中だというのに、隣に座る彼はまるでこたつの中の猫みたいに背中を丸めて眠っている。そのまったりした空気が伝染しそうになりかけた瞼を無理矢理こじ開けてシャーペンを握った。あんばん食べたいなあ、なんて思いながら。

「春ちゃん…」

眠気を誘う甘ったるい低い声と、左手に触れたいつもより少しあつい指先。シャーペンを握っていた力がふにやりと抜けた。指と指がゆつくりと絡まっていくたびに息が詰まりそうになる。こんな甘酸っぱい感覚、坂田くんをすきになっではじめて知ったの。

「おやすみ…」

ことばとは裏腹に、まどろんだ瞳がわたしを見つめている。机に頬つぺたをぺったりとくっつけてへらつと笑う彼のふわふわの髪の毛に触れたいなあと思ひながら、繋いだ手はそのままに、つられて笑う。坂田くんがそつと視線を逸らしてつぶやく。

「あー…ぎゅっとしてー…」

「ん？牛丼？おいしいよねえ」

「…春ちゃんお腹空いてんの？」

牛丼もいいけど肉まんとか食いたくね？と、彼はやさしい牙を見せて笑った。

午後18時32分（前書き）

また明日。

午後18時32分

きみに食べられるのなら、本望です。

「肉まんふたつにあんまんひとつ」

コンビニに入っても離れない手に拳動不審になり、慌てて見上げた彼の顔は「離す意味が分からない」と言った表情をしていたから更に頭の中がぐるぐるしてしまった。坂田くんの匂いがするマフラーに顔半分をうずめてひとりで恥ずかしがる。きっといつまでたっても、慣れることはないのかもしれない。

「夜になる時間早くなってきたよね…もう真っ暗だ」

「夏のときはまだこの時間帯明るかったもんない」

「……お腹、空いたね」

「ぶはっ、」

「笑われた…」

「うんうん、春ちゃんは素直でカワイイネ」

「こども扱いされた…」

わたしは肉まん、坂田くんは肉まんにあんまんを買った。さっそく肉まんにかじりつくわたしを見て坂田くんが何故か爆笑する。肉まんに夢中になりながら歩く色気のないわたしの手をそれでも坂田く

んは離さなかった。

「春ちゃん、あんまん半分あげよつか？」

「ほんとに？」

「嬉しそう」

「うん、嬉しい！一口ちょうだい！」

「一口でいいの？」

「うん！」

「はい、あーん」

「えっ」

「あーん？」

坂田くんが持ったままのあんまんにそのままかぶりついた。モグモグと食べながら、坂田くんを見上げてありがとうと笑うと、何故か顔を逸らされた。もしかしてあまりの大口っぷりに引かれた！？

「なにそれ…かわいい…」

「ん？」

「…俺も春ちゃんに食べられてえ」

「？、坂田くんは食べ物じゃないから食べたりしないよ？」

「そうなの？…でも、俺は食べるよ。春ちゃんのこと」

唇に、やわらかい牙が噛み付いた。味わうように彼の舌が、唇にっいていたリップクリームをじつくりと舐めとる。食べ足りないと言意味ありげな瞳が強請るから何も言えなくなる。

「次は、どこを食べてほしい？」

酸いも甘いも丸呑みにして、わたしの心臓に齒形をつけてニヤニヤ笑う彼に容赦なく飛び込んだ。そしたら、食べかけの肉まんがわたしと彼の間の足元に落下した。「よそ見しちゃ、だめ」と坂田くんが拗ねる。

「大丈夫、坂田くんしか見えてないよ」

先に恥ずかしがって顔をうずめたのは坂田くんのほうだった。

きみといると、毎日くすぐりたい。しあわせを半分こにして、時々ケンカなんかもしちゃったりしながらでもいいからいつしよに歩いていきたいよ。

これからもきみの手を握りかえす役目はわたしでありますように。

午後18時32分（後書き）

“ 見てるこっちが恥ずかしい ” バカップルを目指した結果が、このお話です。

どこを読んでも砂糖まみれになってしまふこんなこっち恥ずかしいお話たちを最後まで読んで下さったあなた様に、感謝です。
ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3059p/>

砂糖づけの指先

2010年12月5日03時53分発行